木下利副氏所蔵の寒暖計（西洋3氏比較表）について

（アート写真説明）

松　本　志　行*

西洋3氏比較表といえば，化学者宇田川榕庵が1831年ファレンハイトとレオミュールの温度対称表を作り，一々換算の労をはぶくために多数の人に渡した相関表のように思われるが，まったく異なった物で，3氏の度盛を記した寒暖計，すなわち3本の寒暖計を並べて箱に収めた物である．

わが国に3氏の温度目盛が渡って来た時期ははっきりしないが，セルシウスが摂氏目盛を考えた，1742年以後であることはたしかであり，寒暖計を作り初めた人では，平賀源内が1768年頃から製作して日本創製寒熱昇降器と名付けた．中村善右門は1840年，稲沢宗庵が診察に使用した体温計の作用を聞いて，直ちに蚕室の温度測定に使用することを考え，華氏目盛寒暖計を製作して蚕当計と名付けて売り出した．又気温の観測記録では，司馬江漢の春波楼筆記（1809）があり，列氏目盛寒暖計を使用している．霊憲候簿は渋川家の測量所の実測目録であり1838年12月より1855年2月迄の天文気象の測候記録であり，度盛は華氏である．浮天斎日記は明治初年兵学校教授となった市川兼恭氏が1851年より1883年まで32年間，東京浅草の天文台で記録した日記で，大部分に天気，気温（目盛は華氏）が記されている．このように寒暖計の製作及び観測の記録は江戸時代中期にもあるが，後期（1793—1867）になって盛になった．

以上のように，寒暖計に関して，諸書に残る記録は，多いが，測定に使用したと思われる現物はあまり残っていない．ここに紹介する寒暖計が，過去の様子をさぐる貴重な資料になると思う．

1，寒暖計の構造

写真1，2で分るように，表面がガラス張りで，木製ラッカーぬりの長方形の箱に3本の寒暖計が並べてある．箱の大きさは高さ68cm，横11cm，奥行6cmで，上を柱にかけるようになっている．寒暖計の長さは中央の物で58cmあり，左右の2本は，球部近く10cmの所で，ガラス管をななめ上にまげてある．

寒暖計の度盛については，左部に列政瞭兎氏と書いた列氏目盛が，記されてあり，管内には紫色の液が入っている．中央は普連歌乙土氏と書いた，華氏目盛の寒暖計で，水銀が入っている．右方には施兎失施氏と記した摂氏目盛で，赤い液が入っている．これらの度盛は箱の下に一ぱいに敷かれた紙に黒で数値が記されていて，列氏・摂氏は算用数字で，中央の華氏は漢数字で目盛ってある．その他に華氏30°を最低として上方へ二十四気（5°F毎に）が書き込んである．摂氏寒暖計には，10°C毎に，すなわち−10°Cに厳寒，0°Cに氷点，10°Cに中和，20°Cに温暖，30°Cに暑熱，40°Cに血温，それに100°Cに沸湯点が書き加えてある．

寒暖計の上半部に大きく「西洋三氏比較表」と書いてある．箱の廻りにはガラス球を使用した造花がアクセサリーになっている．

なお寒暖計球部を外気と接するためか，水銀球の後面には球部と同じ位の円い穴がある．以上調べたままに説明した．

2，木下利副氏と寒暖計について

木下利副氏は元岡山県吉備郡足守町の藩主木下家定氏の子孫で，亡父利玄氏（東大文科卒，歌人）より鎌倉に住んでおられる．利副氏は2才の時に父と分かれたので，この寒暖計について，何も知識を持たれないが，母の話によれば，結婚前よりすでに所蔵しておられたとのことである．

吉備郡史（岡山県吉備郡教育会編）によれば，わが国の約百年の鎖国が解かれた享保5年（1720年）の洋学解禁の令と共に蘭学が盛に学ばれ，吉備郡においても，足守藩の侍医として洋方医だった石坂桑亀，箭田村に同業していた児玉順蔵及び足守藩士の緒方洪庵があり，共にシーボルトの門人として蘭学蘭医学者として活躍し，やがて全国の洋学に貢献し近世の文化に寄与したことは多い．

同じく江戸時代は藩学が盛んであり，足守藩においては，利副氏の先祖木下利彪氏（1763—1801）は寛政4年（1792）に藩学校として瑞琢舎を開設して平民子弟に到る迄，学問の道を開き，その上幕末には外国との関係も多くなり，種々の新教育を施し明治維新に到った．これだけのことでも木下家の祖先の洋学研究に熱心であったことが分る．

3，まとめ

以上の事から考えて次のようなことがいえる．

A，西洋三氏比較表とあるように，多分木下家にて，三種の温度目盛が知られた直後に温度目盛の相関を調べるために使用したのではないか．

B，江戸時代後期（1800代）に作製したものだろう．

参考資料

吉備郡史　岡山県吉備郡教育会　昭12.8.15.

日本寒暖計史　三上義夫　昭11.　中外医事新報

*　—1956年7月27日受理—